

エドナ・オ布莱エン試論 (1)

— 母への憧憬 —

岩 上 はる子

(昭和61年5月29日受理)

はじめに

アイルランド女流作家エドナ・オ布莱エン (Edna O'Brien 1930—) の主題は愛と孤独の問題に集約される。愛は人類永遠の命題であって、多くの文学の普遍的テーマとなってきたものである。その中でオ布莱エンの独自性はといえば、それは作品の随所に描きだされているアイルランド的状况——貧困、暴力、文化の停滞、狭隘な精神的風土、頑迷な宗教性など——のなかで、人間の孤独と愛の真実の意味を執拗に問いかけていることにある。オ布莱エンの作品の舞台であるアイルランドは、それ自体がひとつの主題であるといってよい。彼女の作品の孤独感と愛の飢渴感、荒涼とした背景のなかにおかれてはじめて理解されるものである。ところがオ布莱エンの作品は国内でよりもむしろ国外で共感をもって迎えられている。(本国アイルランドではなくイギリスで出版されているほか、とくにアメリカで好評である。) それは彼女の主人公たちが既成の倫理にとらわれることなく、他者との真の結びつきを模索していく姿勢が読者に激しい衝撃を与えているからである。そこに個別アイルランドの状況をつきぬけた普遍的テーマがみられる。

愛の諸相には男女の愛のみならず同性の愛、肉親の愛、師弟の愛、さらには神への愛など様々な形がある。オ布莱エンは愛を男、母、故国などとの関係において追求している。そしてそこには一貫して他者との一体化に対する強い願望が認められる。オ布莱エンの描く主人公たちは一様に愛に飢え、けして満たされることのない愛に悩む女性たちである。愛に期待しては裏切られ傷つきながら、あえてまた愛に賭けようとするところに彼女たちの共通の姿がみられる。オ布莱エンの小説のひとつの特徴は愛への夢と幻滅という出口のない繰り返しかえしであるといえよう。主人公たちの求める愛はつねに拒まれ、その愛の理想はけして実現されない。拒絶されながらもなお愛を求めずにいられないところにオ布莱エンの主人公たちの哀れさ、悲しさがある。彼女たちが嘆き悶えつつも愛の理想を捨てないのは、彼女たちが愛なくしては生きられない人間であるがゆえにほかならない。

オ布莱エンの求める愛の理念は、他者との完全なる融合を達成することにある。具体的には母の胎内での安寧と静謐とを再び回復することを志向しているといえる。このことは様々な形で描か

れる愛の基底に母への憧憬がみとめられることでもわかる。主人公たちは、究極的には母の胎内での一体感と類似した状況を再現することを希求しているのである。愛の追求の過程であられる曲折は、母の愛への渴望と失望のヴァリエーションであることが指摘できる。したがってオブライエンの愛のテーマを考える場合、その原点である母娘の愛の問題からまず出発しなければならないと考える。本論では作品にあらわれる母娘の関係の諸相をとらえ、オブライエンにとって母なるもののもつ意味を明らかにしていきたい。

作品における母の位置

オブライエンの自伝的エッセイのひとつに *Mother Ireland* (1968) という題名の作品がある。故国にたいする呼称がいくつかあるなかで、オブライエンが‘母’という比喩を用いている意味を考えてみたい。自分が生まれ育った国を懐しさをこめて母と呼ぶのはごく一般的であるが、オブライエンの場合、母なるアイルランドによせる感情には単純なノスタルジアだけでは説明しきれないものがある。作品はつぎのような書きだしで始まっている。

祖国とは母親あるいは父親のようなものである。それは自分を生んだ男あるいは女にたいして心秘かにいなく、あの鳥肌たつ思いを搔きたてずにはおかない。⁽¹⁾ (傍点筆者)

「鳥肌たつ思い」は原文によれば ‘emotional bristle’ であり、オブライエンの母国に対する複雑な感情を生々しく感覚的な表現で伝えている。オブライエンにとって自分を生み育てた国というものは、否定しざることをできない自分の体内に流れている血そのものなのであって、それゆえに相対化することもできないままに、矛盾にみちた感情を露呈させずにはおかないものなのである。

そうした母国に対する愛憎半ばする思いをオブライエンは、自分に生命を与えながらかつその生命の自由な飛翔を阻もうとする母親に対する感情と重ねあわせている。つまりオブライエンは時に母の中にアイルランドをみ、あるいはまたアイルランドの中に母をみて、そこに生涯断ち切ることのできない紐帯、濃密な血の繋がりを感じているのである。アイルランドに対するのと同じように母に対しても、オブライエンは終始、自己の感情の平衡を保ちえないままに向かいあっている。母と娘とのあいだで繰りひろげられる葛藤は、彼女の作品に一貫して流れるモチーフなのである。概観すれば、三部作といわれる *The Country Girls* (1960, 以下CGと略記する), *The Lonely Girl* (1962, ペンギン版では *Girl with Green Eyes* として1964年に出版, 以下GGEと略記する), および *Girls in their Married Bliss* (1963, 以下GMBと略記する) においては、主人公のケイトが少女期をへて結婚し、やがて結婚に破れるまでが跡づけられているが、後述するようにそうした

ストーリーと重なりあうようにして、彼女の心の中では母との関係のテーマが展開されているのである。ケイトにとって母は時に恋人よりも夫よりも、そして子どもよりも身近な存在であり、ある意味で彼女は終始、母親から自立することがないともいえる。こうした母娘の親密な関係は最新の長編小説 *Johnny I Hardly Knew You* (1977, 以下 *Johnny* と略記する) にまで流れこんでいる。その主人公ノーラのなかに母は抜きがたい存在として棲みついでおり、彼女は母への激しい敵意と愛執のあいだで揺れ動く。このように主人公たちの愛の遍歴の過程には、母との愛憎関係が密接に絡みあっているのである。それがオブライエンの作品に深い奥行を与えているともいえよう。

母と娘の軋轢

上に述べたようにオブライエンの主人公たちの意識の底には必ず母の存在があって、彼女たちが母を意識せずに行動することはほとんどないといってよい。彼女たちの中には母を捨てきりたい気持と母に抱かれていたい気持との二律背反する感情がある。すなわち母の影響力を一方では呪縛と感じて反発しながらも、他方では血で結ばれた人間のみが与えうる母性愛に執着しているのである。こうした娘の屈折した心理は、たとえば短編集 *The Love Object* (1968, 以下 *LO* と略記する) に収録されている 'Cords' に克明に描かれている。そこでまずこの短編作品を詳細に検討することから始めたい。物語はロンドンに住む娘を、アイルランドの片田舎から母親がはるばる訪ねていくところから始まる。懐しいはずの母娘の再会だが、母の胸にはわだかまるものがある。それは描出話法に近い形でつぎのように語られている。

She was setting out on a visit to her daughter Claire in London, just like any mother, except that *her* daughter was different: she'd lost her faith, and she mixed with queer people and wrote poems. If it was stories one could detect the sin in them, but these poems made no sense at all and therefore seemed more wicked.⁽²⁾

娘のクレアは母の眼からみれば普通の娘とはちがっている。そしてそれを母が好ましく思っていないことは、つづくコロンの文章に明瞭である。すなわち母のこぼれを要約するならば、クレアは「信仰を失い」「いかがわしい連中とつきあい」「不道德な詩」(wickedは強い道徳的非難を伴う語である)を書いている不良娘ということなのである。自分たちの世界をとびだして、異教徒の地ロンドンで勝手気ままな生活を送っている28歳の独身の娘を、母が罪人のひとりとみなしていることは sin という語に歴然とあらわれている。ここに母娘の対立点のひとつがあるかにみえる。だが一方、娘には娘なりの家を離れなければならなかった理由、詩を書かずにはいられない理由がある

のである。そうした内面の苦しみを察しようとしめない母に対して、クレアは恨みがましい気持ちを抑えることができない。クレアの母に対する反発の気持はつぎのように語られている。

Her mother had no notion of how lonely it was to read manuscripts all day, and write a poem once in a while, when one became consumed with memory or an idea, and then to constantly go out, seeking people, hoping that one of them might fit, might know the shorthand of her, body and soul.⁽³⁾

母は自分の狭い道徳意識のなかでしか世界をみようと思わず、その偏狭なモラルに照らして娘を断罪しようとする。しかしクレアの問題は彼女をむしばむ孤独であり、また彼女をさいなむ過去の記憶なのである。こうした問題のズレこそが母娘の断絶を物語っているともいえよう。ふたりの対立の原点はしたがって道徳意識をめぐるということよりも、はるかに根の深い感情問題であるのだ。そして両者のあいだに潜在していた微妙な感情のきしみは、やがてクレアのボヘミアン的な友人たちをめぐる口論をきっかけに一挙に表面化する。それまでは互いへの礼節から抑えられていたものが、今やすっかり曝けだされるのである。

無意識のうちにクレアの口をついて出た母への非難のことばは、幼ない日のあるひとつの事件に関するものだった。それは事件ともいえないようなごく些細な出来事にすぎない——母が医者に欺かれるようにして爪先を手術されたことを、無神経にも平然と幼ない娘に話して聞かせた——のだが、それは現実にはクレアの心に思いもよらない傷痕を残すことになったのである。たとえば後年クレアがサウナ風呂に入ったとき、「流れる自分の汗が一滴、一滴、血に変わったように思って」恐怖のあまり叫び声をあげたというエピソードがある。ここにもうかがえるように、幼ない日に出会った血なまぐさい事件がクレアの心のなかに精神的な傷となって残り、今なお彼女の恐怖と不安の源になっているのである。クレアが詩を書いたりアルコールを求めたりするのも、ひとつにはそうした過去の出来事の強迫観念から逃れたいためであることは、つぎの彼女の内的独白が明確に語っている。

She undressed, she told herself that her four fingers had healed, that her mother's big toe was now like any other person's big toe, that her father drank tea and held his temper, and that one day she would meet a man whom she loved and did not frighten away. But it was brandy optimism.⁽⁴⁾

それでは次になにゆえにその事件がそれほどまでに重大な意味をもったのか、そのためにクレアが受けた心の傷とは何であったのかを考えてみたい。まず指摘できることは、事件を機にそれまで

の母娘関係が一変したという事実である。すなわちクレアがそれまで母に対して抱いていた、優しく献身的に自分を愛してくれていた母のイメージが、その事件によって一瞬のうちに破壊されたということである。母に寄せていた全幅の信頼が痛ましく踏みにじられたばかりでなく、さらに残酷で冷淡な母の素顔をかいまみることになったのである。つまりクレアにとってその事件は、いわば母の裏切りを象徴するものであったということができよう。このことからさらに次のことが考えられる。母に裏切られたというのは娘の側の論理であって、母親自身には娘を傷つけたという意識もなければ、ましてや娘の怒りや恨みなど想像すらしていない。医者が用いたトリックも母にしてみれば、なるほど多少は残酷な話ではあっても、日常によく見受けられる‘駆けひき’のようなものにすぎない。ところがまだ幼く感じやすい少女の眼には、こうした小さな現実も十分に暴力的なものとして映ったのである。そして少女にとって何よりも恐しい発見は、そうした暴力的な人生から自分を守ってくれるはずであった母を、もはや信頼できなくなったという事実である。この世でもっとも信頼していた母に裏切られたというショックは、クレアの記憶に焼きついた血のイメージと結びつけられ、彼女のなかにいつまでも鋭い痛み感覚を残している。信頼しきっているものに突然に裏切られるという不安が、クレアのその後の人生を甚だしく困難なものにしていくのである。信頼は容易に裏切られるという不安、そして荒々しい人生の直中にひとり投げだされたという恐怖、それらがクレアの強迫観念を構成しているのである。

人生に対するクレアの不安の背景には、今も記憶に残る幼ないころの悲惨な日々がある。母との再会でクレアが恐れているのは、あの頃の悪夢がふたたび甦ることである。すなわち ‘…she did not want any disclosures now, any declaration about how hard life had been and how near they’d been to death during many of the father’s drinking deliriums.’⁽⁵⁾ という思いなのである。酒乱の父親の暴力に脅えた日々、役人の差し押さえ、絶望にかられた母親の叫び声、そうした事のひとつひとつが今も生々しくクレアの心によみがえる。母はそうした幻滅と失望の毎日をそれが人生であると諦め耐えていくが、娘は惨苦に出会うたびにその繊細な神経をひき裂かれていく。生活の中にある種々の暴力によって、少女の内面は無惨に切り刻まれていくのである。生きるとはただひたすらに神を信じて与えられた苦難を耐え忍ぶことだとする母親の人生観が一方にあるとすれば、また一方には人生とは暴力以外の何ものでもなく、生きるとはすなわち無限に傷つけられ血を流しつづけることでしかないのだというクレアの人生観がある。そしてふたりのあいだに横たわるこの違いは最後まで消えることがないのである。クレアのこうした姿はオブライエンの女性主人公たちの多くに共通してみられる性格であるといえる。彼女たちは強靱な意志をもって積極的に人生を切り開いていくのではなくて、人生の現実に出会うたびに激しく傷つけられ、もっぱら敗北主義的に自己を後退させていくのである。オブライエンの小説世界の特徴のひとつとしてやはりこの脆さ、傷つきやすさ (vulnerability) を指摘しておかねばならない。

母なるものへの憧憬

‘Cords’ はクレアが空港で母親を見送るつぎのような場面でおわっている。

At the barrier they kissed, their damp cheeks touched and stayed for a second like that, each registering the other's sorrow. 'I'll write to you, I'll write oftener,' Claire said, and for a few minutes she stood there waving, weeping, not aware that the visit was over and that she could go back to her own life now, such as it was.⁽⁶⁾

母も娘も互いのあいだに横たわる断絶を埋めることもできずに別れていくことに深い悲しみと失望を感じている。母は自分たちの理解を越えた世界でひとり孤立し自分を恨みつづける娘を悲しみ、また娘はついに理解しえないままに去っていく母に涙を流しつづける。クレアにとって母の訪問が終ったことは、必ずしも母との軋轢の終わりを意味しない。それはむしろ、より痛切な悲しみの始まりなのである。なぜならばクレアは母への失望や怒りや恨みをひきずりながらも、その一方では母の愛と優しさに飢えているからである。

愛の飢渴の苦しみはオブライエンのそもそもの出発点から認められるものである。自伝的色彩が濃いとされる *The Country Girls* においては、主人公のケイトが14歳の夏に母親は湖で溺死する。ちなみにオブライエン自身の母は Grace Eckley の報告にもあるようにいまだ健在である。⁽⁷⁾ むろん作者と主人公とを同一視することにそもそもの問題があるにしても、なによりも興味ふかいは母親を喪われたもの、二度と触れあうことのできないものとして設定している点である。喪失感に悩むケイトは凍りつくような孤独のなかで、心の空洞をうめてくれるものを求めてあがく。だが彼女は深い愛情によって結ばれていた幼ないころの母とのあの一体感を、二度と再び回復することはないのである。

ここで最新の短編集 *The Returning* (1982) に収録されている ‘My Mother's Mother’ にふれておきたい。母の母といえば通常 grandmother であるわけだが、この作品は必ずしも主人公の祖母について語ったものではない。むしろ king's king (「王のなかの王」「最高の王」) の意味合いにちかく、あえて ‘My’ という所有格をつけているのも「私にとっての最高の母」の意味であろうと理解される。荒筋を紹介すれば、夏休みに母の実家に遊びにいった主人公が田舎でのもの珍しい生活を楽しみながらも、母のいない毎日を寂しくおもしろい、母が迎えに来てくれる日を心待ちにしている。ところが約束の日に母親が現われなかったために我慢しきれなくなった主人公は、内緒で家に帰ってしまう。祖母にことわりもしないで帰ってきた娘を母は厳しく叱る。母の叱責をうけながら主人

公はつぎのように思うのである。

Sitting there I both wanted to be in our house and to be back in my grandmother's missing my mother. It was as if I could taste my pain better away from her, the excruciating pain that told me how much I loved her. I thought how much I needed to be without her so that I could think of her, dwell on her, and fashion her into the perfect person that she clearly was not.⁽⁸⁾

ここには母への思慕の情が悲痛な調子で語られている。幼ない主人公は‘痛み’をおぼえるほどに母を慕い、心のなかにいる母の面影を追い求める。だがそれは永遠に把えることのできない幻影なのである。現実の母に対するとき、そこには思い描いていた母とはまったく別の母が現われる。彼女の希求する母は、現実の母から離れたところにしか存在しえないのである。彼方に存在する人間、いいかえれば不在の人間に対する憧憬、思慕がオブライエンの母親像の根底にはあるといえる。換言するならば、「不在」あるいは「喪失」の痛みというかたちでしか、母への愛を確認しえないということであるのかもしれない。ここにオブライエンの求める愛が宿命的に背負わされている困難さがあるといえるだろう。

母胎への回帰願望

それでは何がオブライエンをして、このように困難な愛の希求へと駆りたてるのであろうか。それは恐らくオブライエン自身のなかにある喪失感と深い関わりがあるものと考えられる。オブライエンにとってこの世に生まれてきたその日から、日々の生活は母の胎内での安寧と静謐から刻々と遠ざかっていくことにほかならない、人生とは時間のなかで大切なもの、完璧であったものを次第に失っていくことでしかないといった感覚がある。それはいくつかの作品のなかに母胎への回帰願望というかたちをとって顕われている。まずそれを直接的に語ったものとして、Nell Dunnとのインタビューでのオブライエンのつぎの発言を引用しておきたい。

...there is, there must be, in every man and every woman the desire, the deep primeval desire to go back to the womb. Now physically and technically really,... a man partly and symbolically achieves this when he goes into a woman. He goes in and becomes sunken and lost in her. A woman never, ever approaches that kind of security.⁽⁹⁾

女にはけして到達しえない安穩な世界。オブライエンはその満たされない願望を ‘The Mouth of the Cave’ (LO 収録) という作品で、きわめて象徴的に表現している。岬の別荘に住む主人公の女性が、たまたま海ぞいではなく山ぞいの道をたどって村に出ようとしたとき、通りがかった洞窟のなかでおそらく服を着ようとして起きあがった裸の少女を見かける。彼女は少女が別荘をたずねてくれることを期待して待ちつづけるが、少女はついに現われない。その後、幾度かあの山道をたどってまた少女に会いたいという気持に強くかられるが、主人公はけしてそれを実行に移さない。ストーリーらしいものもない把えどころのない物語ではあるが、この作品について Grace Eckley はつぎのように考察している。‘Since only a man can enter the woman’s cave, the title symbolizes both the woman’s physiology and the unfulfilled desire.’⁽¹⁰⁾ この指摘のとおり、そこには論理化しえない女性の微妙な心理がみられ、何かしら心満たされない気分、女であるがゆえの諦めや哀しみといったものが象徴されているように思われる。

オブライエンがセックスを母親の胎内への回帰のための試みと考えていることは明らかで、母胎への回帰願望は女性主人公たちの異性への愛のかなり本質的な部分を占めている。一例として GMB のなかのケイトのことばに注目したい。夫のユージンに突き離され投げどころを失ったケイトは、行きずりの男との束の間の性に慰めを見出そうとするが、その期待は無惨にうち破られる。ケイトは思いやりのかけらもないような男の腕のなかで、こんな思いにとらわれる。

She curled up, accommodating her body to fit into the hollow of his. She thought how nice if women could become the ribs they once were, before God created Eve. How gentle, how calm, how unheated, how dignified, to be simply a rib!⁽¹¹⁾

ここに認められるアダムの骨になりたいという願望は、先に掲げたような、かつて自分が棲んでいた子宮の内部に再び帰りたいという欲求と同じく、一種の退行願望のあらわれである。それは苛酷な現実を逃れて安全と安逸に身をひたしていたいという逃避願望であるということもできる。先に指摘したオブライエンの小説世界の特徴である脆さ、傷つきやすさと考えあわせてみると、このような母親の胎内によせる強い郷愁も理解に難くない。主人公たちが母親との血の結びつきに執着する大きな理由は、母娘だけで形成していた親密な子宮内の自閉的世界へ復帰したいという願望のためであると考えられる。母の胎内こそが外界の脅威から身を守ってくれる最も信頼すべき、最も平和な、最も安らぐ場所だからである。その唯一の避難所への強い憧憬と、そこに受け入れてもらえないことへの失望と悲嘆とが、母に対する愛と憎しみの感情を形成しているのである。

母なるものの意味

しかしながら母の愛はすべてを赦し受け入れてくれる大らかな愛であるというのは幻想にすぎないともいえよう。母親はつねに懐しい故郷でありノスタルジアをかきたててやまないものとは限らない。オブライエンは確かに母の神話に魅せられてはいるものの、他方では母性愛にともなう否定的側面をも赤裸々に描きだし相対化している。母性愛のかけに隠された子どもへの支配欲、所有欲、そしてそれらの子どもに及ぼす破壊的作用を鋭く凝視しているのである。

たとえばケイトの場合をみると、母との関係は三部作を通じて次第に変化していくことがわかる。⁽¹²⁾最初のCGにおける「ママにとって私が世界じゅうのすべてであった」という文章が物語るような母娘の一体関係は、まもなく母の死によって損なわれ、その後は徐々に変質を余儀なくされていく。喪失感に悩むケイトは母との一体感にかわりうるものを異性のなかに求めようとするのだが、それを母への裏切り行為と感じて「良心の痛み」をおぼえる。さらにGGEにおいてユージンとの不倫の恋に走るとき、彼女は「亡き母の涙ぐんだ非難の眼ざし」を感じずにはいられない。やがて正式に結婚をして幸福な新婚生活にあるときにも、ケイトはおそろしく惨めで不幸だった母親のことを思いだして、罪悪感に似たものさえ抱くのである。このようにケイトが幸福をかみしめようとするたびに、きまって亡母の姿が浮かんで来ては彼女を後ろめたい気持ちにさせる。母はまるで幸福へのブレーキのようできさえる。そうした母に対する見方が一変するのは、ケイトが母の愛に不信を抱いた瞬間からである。自己犠牲そのものと信じて疑わなかった母の愛が、じつは自己愛に発するきわめて利己主義的なものであることを知ったとき、ケイトは母に対して烈しい嫌悪をおぼえる。その際のケイトの心の変化がつぎのように描かれている。

Now suddenly she saw that woman in a different light. A self-appointed martyr. A black-mailer. *Stitching the cord back on.* Smothering her one child in loathsome, sponge-soft, pamper love.⁽¹³⁾ (イタリック体筆者)

優しく包みこむようだった母の愛も、いまは自分を窒息させるうとましいものを感じられ、その溺愛は自分を所有し支配するための狡猾な手段であったかのように思われてくる。自己犠牲もひとりで勝手にきめこんだ殉教者気どりであって、子どもをその悲惨な生活に巻きこんだことに対して許しがたい怒りをおぼえるのである。ところでこの引用で注意しておきたいのは‘cord’という語である。この文脈では、それはいうまでもなく‘an umbilical cord’すなわち「へその緒」を意味しており、したがってこの文章は、自分が産んだ娘との血の繋がりを再び回復しようとする母親の支配的な感情をあらわしたものと見える。先に論じた短編‘Cords’の題名にもたんに精神的な「絆」

という意味ばかりでなく、より重い根源的な「血の繋がり」ひいては「呪縛」といった象徴的な意味までこめられていたわけである。ここにおいて母性愛は凄まじい執念を露わにし、優しい包容力も暴力的な支配力へと変貌していく。

つづいて主人公が母親である場合の母性愛をみてみたい。オブライエンは *GMB* や *August is a Wicked Month* (1964) さらに *Johnny* において、それぞれの主人公であるケイト、エレン、ノーラを一児の母として設定している。そこに共通してみられるのは「母になりきれない女の姿」である。たとえばケイトは息子を溺愛しながらも、満たされない想いを抱えて情事の相手のもとに急ぐ自分を抑えることができない女性である。夫ユージンの非難のことばを待つまでもなく、ケイト自身が自分のなかに潜むエゴイズムを苦い気持で認めている。すなわち最も大切なのはつねに自分であって、他の人間——子どもをも含めて——に対して思いやりをもつことのできない自分に自己嫌悪を感じているのである。母性愛のひとつの特性であるはずの無私的愛も、ケイトとエレンの満たされない自我の意識の前には発現しえない。女としての彼女たち自身が感じている愛の渴きは、母として子どもに愛を注ぐことによって癒されるものではないし、またその愛も純粹に利他的な母性愛とは似もつかないものになってしまうのである。

以上のような点からみるならば、完全なる母性愛などひとつの幻想にすぎないもののように思われてくる。あるいはすでに指摘したように、強い憧憬が生みだす非現実のものといわざるをえないようである。オブライエンは一方でこうした母性愛の困難を描きながら、他方ではその愛の理想を追いつづけているわけである。そうしたいわば自己矛盾を抱えつつ夢をみることの背景には、たとえ幻想の愛であろうとも、それへの希求がなくては自らの生を支えていくことができないという現実があるのである。オブライエンの主人公たちの愛の成就を妨げているものは、ひとつには外ならぬ彼女たち自身のエゴイズムであるということはいえよう。彼女たちは激しく愛を求めながらも、自らが愛を与えることを知らない。自分ひとりの感情にのみこだわり、相手もまた自分と同じように孤独に悩み、他者に愛されることを必要としている人間であることに思いが及ばないのである。だが翻っていうならば、それほどまでに彼女たちが愛に飢えているということなのであり、自己充足からはほど遠い現実の証左にほかならないのである。

む す び

最後にオブライエンの最新の長編小説 *Johnny* にふれておきたい。ここでは主人公のノーラの中でふたつの問題——母との軋轢と息子への愛執——が平行して展開されている。つまり母との関係と子どもとの関係というこれまでのテーマが、この作品では同時に取りあげられているのである。まずノーラにとって母は「自分のなかに巢食い、脱ぎ捨てることのできない存在」となっており、

娘がほかの人間に愛情をむけようとする「蛇のように陰険に」じゃまをし、幸福をつかもうとする娘にいつも無力感をおぼえさせる存在である。男への愛が成就しないのも、ひとつにはこの母の嫉妬のためであるとさえ主人公は感じ、「殺してやりたい」とまで思っている。だがそうした母を彼女は同時に、この世の誰よりも愛し慕ってきたのである。ノーラの中にはこの母から「離れたい気持」と「離れたくない気持」との背反する感情が混在し、母に対する愛と憎しみが同程度の激しさで渦まいている。そうしたノーラが実りなき男との愛の果てに、また愛憎の絡みあう母への思いを離れて求めるのは、息子との近親相姦の夢である。男一般あるいは母との関係では得ることのできない、息子との完全な一体感への渴望を、ノーラはつぎのように語っている。

Oh to be loved by him. Incest raising its little tonsured head. It must be the nearest thing to birth, to couple with one's own, to reunite.⁽¹⁴⁾

我が子との一体感を取り戻したいという心理は、先に引用した *GMB* (注13) の母親の心理と酷似したものがある。近親相姦といえかなり衝撃的に響くが、オブライエンの愛の追求の過程でみるならば、他者との完全なる融合という理念がもっとも突きつめられた形で形象化されているように思われる。現実のノーラは息子への愛の代償行為として、息子の友人ハートとの恋にのめりこんでいくのだが、それは結局、成就することなくハートの殺害という破壊行為で幕を閉じる。オブライエンが一貫して求めつづけてきた完璧な愛、他者との一体化の夢は、この作品においても実現されないままに終わっているのである。

しかし何よりも注目すべきことは、オブライエンの愛の対象がだれであるにせよ、終始一貫して他者との完全なる融合を志向していたという点である。そしてその他者との一体化への願望の基底にオブライエンの母胎への回帰願望が横たわっていることを本論では論じてきたわけである。オブライエンにとって母の胎内の安寧と静謐こそが愛の理想郷なのであり、そこに彼女の求める愛の原型が存在する。その愛の遍歴がじつは母の愛を求めての彷徨であったといってもよいだろう。しかし母胎への回帰は決して実現されえないものであり、そのためオブライエンの愛の旅は絶望的なものとならざるをえない。オブライエンの描くさまざまな愛の過程に必然的に伴ってあらわれてくる愛憎併存は、こうした根源的な矛盾を抱えているからにはほかならない。オブライエンの愛の希求はそもそもから自己矛盾を内包し、絶望を運命づけられているのである。

注

- (1) *Mother Ireland*, 『わが母なるアイルランド』 岩上はる子訳, ありえす書房, 1985年。
- (2) 'Cords' (*The Love Object* 収録) p. 115, 以下テキストはペンギン版を使用。
- (3) *Ibid.*, p. 125
- (4) *Ibid.*, p. 127
- (5) *Ibid.*, p. 118
- (6) *Ibid.*, p. 130
- (7) Grace Eckley, *Edna O'Brien* (Irish Writers Series), Bucknell University Press, U. S. A., 1974, p. 14
- (8) 'My Mother's Mother' (*The Returning* 収録), p. 40
- (9) Grace Eckley, *op. cit.*, p. 130
- (10) *Ibid.*, p. 130
- (11) *Girls in their Married Bliss*, p. 150
- (12) 『わが母なるアイルランド』 解説 pp. 173-178 において詳述したので, ここでは結論のみ簡単に記す。
- (13) *G M B*, p. 123
- (14) *Johnny I Hardly Knew You*, p. 17

An Essay on Edna O'Brien (1)

— A Longing for the Mother —

Edna O'Brien reveals an ambivalent feeling toward her own country in *Mother Ireland*, which starts like this: "Countries are either mothers or fathers, and engender the emotional bristle secretly reserved for either sire." As the word 'emotional bristle' suggests, Ireland is deeply rooted in O'Brien, continually obsessing her. She is unable to keep aloof emotionally from the place which gave birth to her and brought her up.

The same thing could be said about O'Brien's attitude toward her mother. The love-hate relationship between a mother and a daughter can be seen in most of her works. Kate, who lost her mother in an accident at the age of fourteen, searches for the image of her mother even though she loathes and fears her mother's possessive and suffocating love. In a sense, Kate seeks men to fill a void left by her mother's death. Kate expects men to love and protect her from the outside world just as her mother did.

'Cords,' one of O'Brien's short stories collected in *The Love Object*, depicts the intense conflicts between the daughter Claire and her elderly mother. Claire lives alone in London like a Bohemian resenting the religiousness, narrowness, and exclusiveness of her mother and the country she represents. Still, at the bottom of her heart, Claire eagerly seeks after her mother's love. The title "Cords" itself implies the bond of blood as in 'an umbilical cord,' thus suggesting the strong attachment of Claire to her mother. In *Johnny I Hardly Knew You*, the heroine Nora shows contradictory feelings toward her mother. She also holds an ardent desire to be united with her own son.

Most of the heroines in O'Brien's novels have a keen desire for love. They suffer from an unbearable solitude and seek men who will hold them body and soul. They dream of being in men's arms just like an infant nestling in its mother's bosom. Behind this aspiration lies O'Brien's 'Jonah complex,' a desire to go back into the womb of one's mother. The serene and peaceful world inside the mother is the ideal land O'Brien has been pursuing. This paper discusses Edna O'Brien's longing for the mother which underlies various kind of love that appear in her works.